



惑星会合（2）

—惑星会合より見た中国古代史—

作花一志（京都コンピュータ学院）

1. 五星聚井

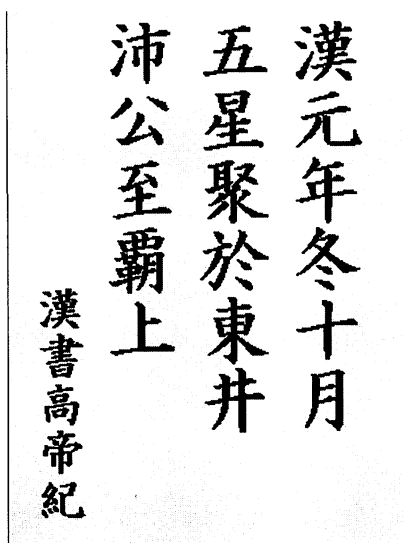


図1. 漢書高帝紀

図1は中国の歴史書「漢書高帝紀」の記述である。その意味は、

—漢元年の冬十月に五惑星が井宿の東に集合し、このとき沛公が覇上に到着した—
今を去ること2200年、秦が滅び漢が興るころ

の話である。沛公とは後に漢の初代皇帝高祖となった劉邦のことで、彼が秦の首都咸陽近くの覇上に到着した時に水星・金星・火星・木星・土星が一堂に会したという。「漢書天文志」にはこのことは劉邦が天命を受けたしるしであると書かれ、またさらに古い史書である「史記」には年代は記されていないが、漢が興る時に五星聚井

が起こったという記事があり、昔から重視されていた有名な天文現象らしい。中国では星座を〇〇宿といい、井宿とはふたご座の南部に当たる。東井とはふたご座の南からかに座にかけての天域である。

当時の状況を世界史の教科書をもとに調べてみると

BC210・・・始皇帝の死

BC209・・・陳勝・呉広の乱、項羽や劉邦も挙兵

BC206・・・秦王子嬰（三世皇帝）劉邦に降伏して秦は滅亡

BC202・・・劉邦即位

漢の元年とは秦が滅んだBC206年を指すらしい。この時の木・火・土・金・水の五惑星会合については、魏のころから色々調べられていて、BC206年にはそんな天体現象は起こらなかったことが確かめられている。実際、火星を除く4惑星はふたご座周辺にいるが、火星はみずがめ座・うお座辺りにある。そこで数字の写し間違いではないかとか、五星とは一般に惑星のことで必ずしも五つの惑星の集

表. BC300年からAD1年までの五惑星会合

年 (BC)	月日	時分*	星座	黄経差 (°)
245	1 24	—	みずがめ	20
205	5 30	夕	ふたご・かに	21
185	3 26	朝	うお	7
145	7 28	—	しし	10
47	11 29	朝	へびつかい	10

*) — は太陽と五惑星が同じ方向で観望不可

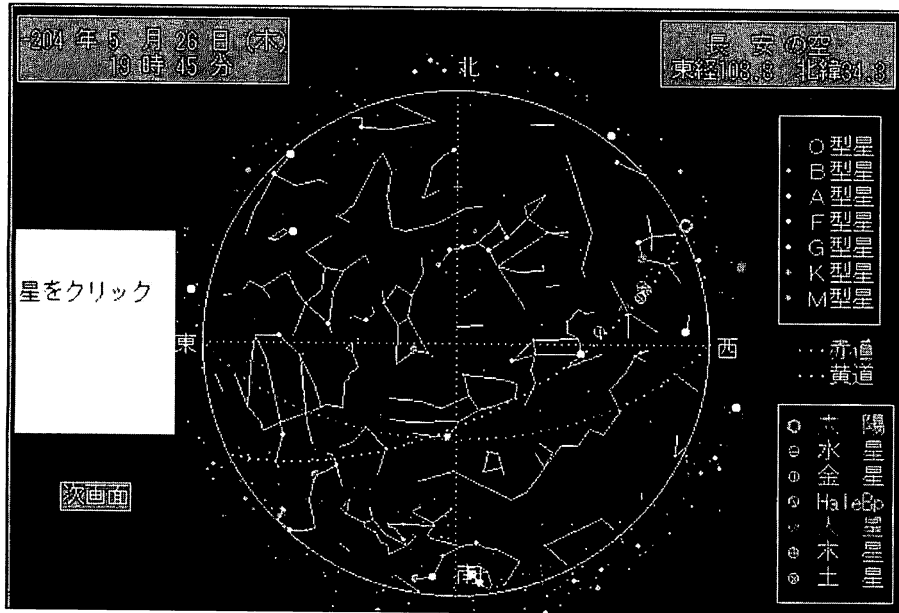


図2. BC205年5月30日、日没後の五惑星会合

合を意味しないと、4惑星と1恒星で合わせて五星とか、そもそもこの記述は後世の捏造であるとか様々な議論がなされているが[1]、[2]、[3]、果して秦末漢初に五惑星会合は起こっていないものだろうか？

BC300年からAD1年までの300年間、五惑星の黄経差が 25° 以内に収まる日を捜してみたところ表のように5回見つかった。しかしそのうち2回は太陽と同じ方向なのでその姿は見られない。

件の五惑星会合はBC205年の5月末に実際に起こっていた(図2)。しかも秦から漢の前半の間、これに匹敵するような五星の近接会合は他には起こっていない。薄明の西空に、ふたご座からその東のかに座にかけて、下から水・木・土・火・金の順に並んでいるのが眺められる。まさに彼らは井宿の東に聚(あつま)っていたのだ…。(なお、当時は現在では見られない南十字座、ケンタウルス座 α 、 β 星などがはっきりと南天に見える。)しかしなぜ半年ずれているのだろうか？これから先は中国古代史の専門知識のない筆者の

偏見に満ちた憶測である。

1) BC205年の5月といえは劉邦は項羽の前に連戦連敗を繰り返し逃げ回っていたころだ。「現王朝開始の天命が下ったのだからそれにふさわしい時期でなければ」ということで漢の歴史家たちは、この天象を劉邦が英雄としてデビューした前年に繰り上げて記載してしまった。

2) 五星聚井の年代の記載は「史記」(完成BC90年頃)ではなく、「漢書」(完成AD50年頃)になってからである。司馬遷はその時期が特定できなかったため、あえて書かなかったが、その後何らかの新資料が見つかったので班固は年代を記載した。ところがこの資料は漢の元年がBC206年ではなくBC205年というものだった。実際、[4]によると史記の中にも漢の元年について種々の説が混在しているという。

2. 夏・殷・周の始まり

上記の「五星聚井」より854年前、ほぼ同じ月日の同じ時刻に同じ方向で五惑星集合が

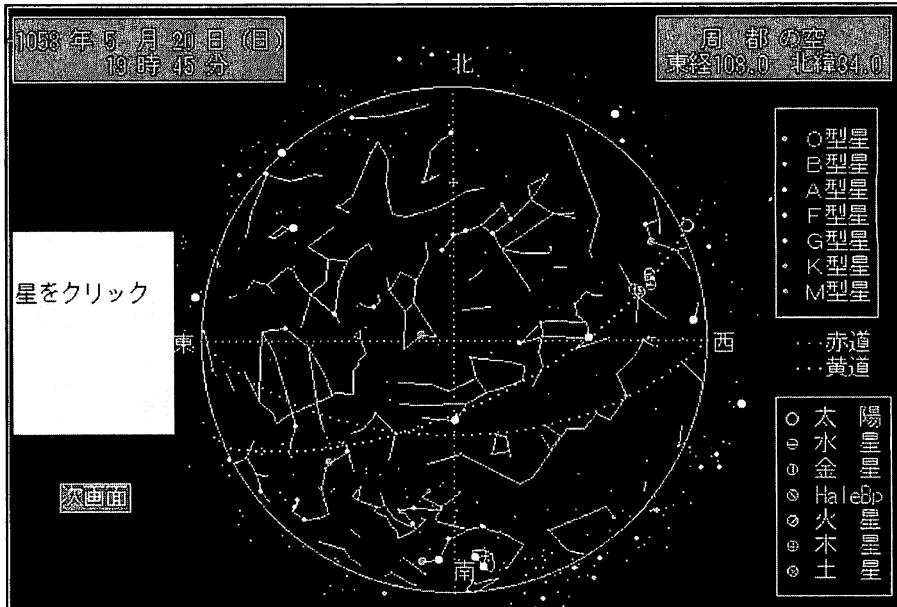


図3. BC1059年5月30日、日没後の五惑星会合

起こっている。図3のようにBC1059年5月30日に、惑星たちは 7° の範囲に収まるが、これは前月号[5]で述べたようにBC3000年から6000年間で3番目にコンパクトな惑星会合である。しかも日没後しばらくの間、西の空のかに座に見えたはずで観望条件は非常にいい。時は殷末、代表的な暴君といわれる紂王の時代であり、その一方、後に聖君といわれた周の文王は有能な人材を集めて、密かに反旗を翻す準備をしていた。文王・武王とその周囲の人々はこの天象を天からの賜物であり天からの命令と解釈し、殷周革命(BC1050年～BC1020年頃)を正当化するための手段に利用したのではないだろうか。後世、漢の歴史家・天文官たちは殷周革命のときと同じ天象が起こったとして、漢初の「五星聚井」を劉邦が帝位に就くのは天命によるものと解釈したのだろう。

BC1953年2月28日の早朝、木・火・土・金・水がみずがめ座に集合した。これは前月号[5]の計算の結果にあるようにBC3000年からAD3000年までの間の最もコンパクトな五惑星の集合である。図4に示すとおり木星は

やや西に離れているが火・土・金・水は 0.5° の範囲に収まっているというすばらしい集いだ。日の出前の6時半ころ、東南の高度約 5° という低い空に起こったイベントを眺めたのはどんな人々だっただろう。大昔のことで、ほとんどの民族はまだ先史時代で歴史的な記録はないが、微かな伝承として残ってはいないだろうか？

エジプトのナイルの兩岸にはすでにピラミッドが建てられ、絵文字が使われていた。その文明の光はまだエーゲ海まででギリシア本土には届いていない。メソポタミアではハンムラビもアブラハムもまだ生まれていない。わが国では縄文時代、中国では殷の前の夏の時代になる。夏王朝の存在は確かめられていないが、その始まりは紀元前21世紀ともいわれ、初代禹は黄河の治水工事の指導者で伝説の聖帝、堯、舜の次に天子に推戴されたという。これより1800年後、漢の時代の劉某が禹の時代に五星が連なり輝いたと伝えているのはこの天象を指すものかも知れない[6]。

その夏は17代桀王のとき商(=殷)の湯に滅ぼされるが、これは最初の王朝交代戦で

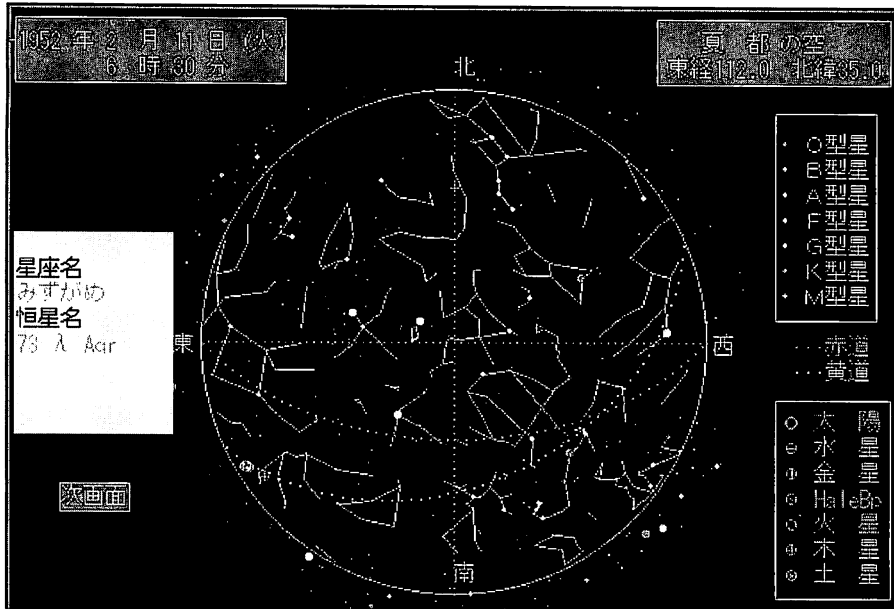


図4. BC1953年2月28日、日の出前の五惑星会合

あった。桀は極悪非道の王であり、一方、湯は聖人君子であると記され、夏より殷への政権交代は天命によるものと後世の歴史家は考えた。この事件は紀元前16世紀のことで、ちょうどその頃BC1576年12月末に金星を除く4惑星がいて座に集合している。

惑星会合は王朝交代の兆しというのは出来すぎた話で、筆者はこんな相関を主張して占星術を述べるつもりはもちろんない。むしろ漢の歴史家・天文官たちは「五星聚井」を漢王朝の正統性の根拠とするため、逆に夏殷周の始まりをすべて惑星集合の起こった時期に設定したのではないだろうか？

なお、上記の星図の日付は計算上すべて現行暦（グレゴリウス暦）に基づく値のみであり、-1952年とはBC1953年のことである。ただし本文中の日付はユリウス値に変換してある。

本稿については筆者のホームページ[7]を参照されたい。

また、本稿の執筆に当たり長谷川一郎氏、横尾武夫氏、横尾広光氏より重要なアドバイスを頂いたことに厚くお礼申し上げます。

引用文献

- [1]能田忠亮, 1943 「東洋天文学史論叢」 p.325 恒星社
- [2]齊藤国治, 1989 「古天文学」 恒星社
- [3]齊藤国治, 小沢賢二, 1992 「中国古代の天文記録の検証」 雄山閣
- [4]平勢隆朗, 2000 「中国古代の予言書」 講談社
- [5]作花一志, 2000 天文教育 2000年11月号, 22-25
- [6]B.E.Schaefer, 2000 Sky & Telescope, May 2000, p.28
- [7]作花一志 ホームページ <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/>